

かとう たくせん
加藤 拓川 (1859~1923)



外交官。政治家。松山城下(現、松山市)出身。松山藩の儒学者で、明教館教授を勤めた大原観山の三男として生まれる。本名は恒忠。号の「拓川」は、松山市郊外を流れる「石手川」に由来する。幼くして儒学に親しみ、藩校・明教館に学び、秋山好吉と親交をもつ。甥の正岡子規を生涯にわたり支援した。

フランス留学を経て外務省に入り、外務大臣秘書官、ベルギー公使等を歴任後、明治41(1908)年には、衆議院議員に当選、任期満了後に貴族院議員に勅選された。また、明治42(1909)年には、改進黨系の新聞『大阪新報』の社長や大阪北浜銀行(現、三菱UFJ銀行)の取締役も務めた。

大正11(1922)年、がんに冒された体ではあったが、要請されて第5代松山市長に就任、城山城跡の払い下げを陸軍省から受けて市民に開放する等、リベラルな政策を遂行する一方、伊予

教育義会会長の井上要(伊予鉄道電気会社(現、伊予鉄道株式会社)社長、北予中学校理事)から、松山に高等商業学校(現、松山大学)を設立する提案を受け、北予中学校(現、県立松山北高等学校)の加藤彰廉校長に協力を求めるとともに、友人の新田長次郎に設立資金の支援を依頼した。また、文部省との設置折衝を行う等、学校設立運動の中心的な役割を果たした。

略歴

| | |
|------------------|---|
| 安政6(1859)年1月22日 | 大原観山の三男として、松山城下の歩行町に生まれる。 |
| 明治3(1870)年 | 松山藩校の明教館に入学 |
| 明治9(1876)年 | 司法省法学校に入校。原敬、陸羯南が同窓であった。 |
| 明治12(1879)年 | 司法省法学校を退学処分となる。 |
| 明治14(1881)年 | 観山の実家である加藤家の養子となる。 |
| 明治16(1883)年 | 中江兆民の仏学塾に学ぶ。 |
| 明治19(1886)年 | 旧藩主の子息・久松定謨の随員としてフランスに遊学、パリ法科大学などで学ぶ。 |
| 明治25(1892)年3月 | 外務省交際官試補になり、欧州の各国に出張 |
| 明治35(1902)年2月 | パリ駐在書記官に任ぜられ渡仏、日仏条約改正に奔走 |
| 明治39(1906)年6月 | 特命全権公使としてベルギーに駐在 |
| 明治40(1907)年5月 | 万国赤十字条約改正会議などに全権大使として出席 |
| 明治41(1908)年5月 | 韓国統監・伊藤博文及び外務大臣・林董と対立して外務省を退職 |
| 明治45(1912)年5月 | 郷党の要請で松山市から第10回衆議院議員総選挙に立候補して当選 |
| 大正8(1919)年1月 | 衆議院議員を満期退任後、貴族院議員に勅選 |
| 9月 | パリ講和会議に西園寺公望大使の随員として出席 |
| 大正11(1922)年5月 | シベリア派遣臨時大使としてシベリア出兵の処理に当たる。 |
| 大正12(1923)年3月26日 | 郷党の強い要請で松山市長に就任 市長在職時に病気のため65歳で永眠。墓所は松山市拓川町の相向寺。 勲一等旭日大綬章が贈られる。 |

〈関連図書〉

- ・加藤拓川『拓川集』 拓川会 1930年~1933年
- ・愛媛県百科大事典編集委員会『愛媛県百科大事典』 愛媛新聞社 1985年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・島津豊幸『加藤拓川伝』 松山大学 1997年

〈主な収蔵資料〉…(P202, 37~38)

〈ゆかりのある場所〉…(P276, 52)

〈関連施設〉…松山市立子規記念博物館

〒790-0857 愛媛県松山市道後公園1-30 TEL:089-931-5566

温山会館

〒790-0826 愛媛県松山市文京町4-2 松山大学内 TEL:089-926-7141